

社会的認知研究の中の「社会性」

遠藤 由美*

社会学部

平成12年度奈良大学研究助成の助成を受け、『対人認知の社会的ベース』をテーマに研究をおこなった。本稿では枠を「対人認知から」少し広げ、社会的認知研究において社会性の視点がどのように変化したかに関する論考の概要を報告したい。

1. 個人主義的心理学の背景

西洋の思想は元来キリスト教の影響で個人主義的色彩の強いものであったが、18世紀の啓蒙主義哲学の時代に個人主義的価値が確立し、社会のさまざまな側面において急速に浸透した。それは、単に思想面の問題に限定されたものではなかった。近代の始まりとともに、人々は封建的束縛から解放され、自分の生きる場所と生業を選択できるようになった。これにより個人は人生の選択肢を獲得し、「いかに生きるべきか」という問いを現実的に抱くこととなった。換言すれば、自己決定によって自分の人生が決まるという人生観を人々が抱くようになり、そのような時代背景の下で個人主義的思想が現実的な基盤をえたのである。

したがって、その後19世紀末ウンタやエビングハウス、フロイトなど心理学の祖と称される人々が心は個人に内在していることを前提として理論を組み立てたのは当然であり、心理学はその当初から個人主義的であった。

2. 社会心理学と社会的認知研究

米国では大戦状況下で説得、リーダーシップなど大衆操作法に関する研究が国家要請として活発におこなわれ、社会心理学が大いに発展した。それは、ある状況における心的機制をの解明することに他ならなかったが、研究者は「状況要因」を意識的にとらえることはなかった。

やがて認知革命がおこり、行動主義への批判から認知心理学者たちが「内的過程」の解明を標榜し、個人の精神活動を当時普及し始めたコンピュータになぞらえ、心の情報処理的機能をコンピュータを用いた実験によって明らかにしようとし始めた。

認知的志向性は社会心理学にも波及し、社会的刺激に対する情報処理はいかなるものかについて認知的研究手法によって明らかにしようとする社会的認知 (social cognition) と称される

サブ領域が誕生した。それは手法の斬新さによって多くの研究者を魅了したが、同時に社会心理学領域にあった社会性の視点を置き去り、ひたすら個人の内的過程解明へ専念する傾向を生み出した。ここに、個人主義的社会心理学はその極みに立ったといえる。

3. 進化心理学と社会性への注目

進化論が「種の起源」の形をとって公刊されたのは1859年である。それ以降、知識として人間がサルとの遠戚であることは広く知られるようになったが、依然として人々は普段自分が動物である事実を認めるのを基本的に好まず、他の動物と決定的に異なる「万物の霊長」であり、「人間と動物」という表現が端的に示すように、人間だけが理性に照られ意識によって自己統制できる存在であると考えた傾向から依然として抜け切れない傾向があった。

しかし、1990年代にはいり、人間の生物学的制約と環境への適応性を視野に入れた進化心理学がToobyらを中心に押し進められるようになった。そこには進化論の知識だけでなく、たとえば霊長類生態学や考古学などさまざまな分野での知見を基盤に、人間と動物を連続体の上に位置づけようとしている。進化心理学の視点は、各領域に細分化された心理学研究に共有可能なメタ理論の枠組みを持たせることに成功し、たとえば、感情や対人認知、意識と自動性の問題など、それぞれの研究領域で「なぜこのようなメカニズムが人間に備わっているか」「適応にとってどのような意味があるか」を問う風潮をつくりだした。

社会認知においては、進化心理学の影響は対人関係性の重視という形で現れることになった。なぜなら、霊長類の一種であるホモ・サピエンスは、他の高等霊長類と同様に安定的固定的群で生きる生き物であり、加えてそのような生態をさらに生存に有利に生かすための高度な認知能力、すなわち個体を識別し、個体間の過去のやりとりを記憶し、自己と他者の行動を予測するという能力を備え、ここに他者のことを絶えず念頭に置きながら自己と他者そして環境との関係を適切なものへ調整する正当な意味における社会性が、研究者の視野に登場することになったからである。すなわち、多くの場合、他者にどのように評価されているかをモニターし、その状況において最も合理的と考えられる対応を生み出すという人間観が社会的認知領域において、研究の枠組みとなったのである。情報処理的アプローチによって社会性視点を失なった社会認知研究は、再び状況要因を取り戻し、それぞれの状況において認知が状況構成員によって（再）構成されるそのメカニズムを解明することがテーマとして回帰したと言える。それによって、たとえば自己研究は単に個人、集団という分類を越えて、周囲の状況における自己のあり方とその理解が問われるようになり、細分化したテーマの統合化の動きも誕生した。

5. まとめ

社会心理学は人が状況の力により大きく影響されることを明らかにするものであったが、認知心理学が個人の内的過程を強調したため、社会的認知心理学はひたすら個人の内的プロセスを追求してきた。しかし、進化心理学的視点の導入により、社会的認知研究は現下の状況要因の考慮必要性を認識するようになり、本来の社会認知研究に近づきつつあると言える。